

# 基礎教育課程における医学・医療英語教育の実践と課題 — ESP としての医学・医療英語教育 —

清水 雅 子<sup>\*1</sup>

## 要 約

近年、国際化・グローバル化が加速度的に進む日本において、大学における一般教育の見直しがなされ、外国語教育の改善、中でも英語教育の活性化がクローズアップされてきた。その論議の中で、特に「使えない英語」教育を増長するとして、主として文学作品を精読する教師指導型の教養英語に外部からの多くの批判が向けられてきた。筆者は現状のカリキュラム上の制約があるかぎり、読解中心の英語教育は基本的で幅広い英語力と教養を身につける一方法として有効であり、また教え育むという教育の視点からも効果的であると見なしている。しかしながら、教材として用いるテキストの内容と英語が必ずしも学生の将来の専門や興味の対象を意識した学生発信型の教育ではなかったこと、多様な英語の文体を知るには限定されたこと、さらに語学として英語を習得するには量的にも限られたものであったことなどに問題があると考えられる。

筆者は、近年における英語教育の改革の流れが始まる以前から、医学・医療の分野を学ぶ学生の目線を考慮に入れ、教養課程の英語教育に communicative approach を中心にした ESP (English for Specific Purpose) の主要な2分野である EST (English for Science and Technology) と EOP (English for Occupational Purpose) を導入し、医学・医療英語と教養英語との融合を試み実践して来た。筆者はコミュニケーションとは単なる英会話や情報の伝達ではなく、思想の伝達を意味すると考え、「使える英語」としての医学・医療英語と教養英語とを有機的に関連づけた教材作成を試み、communicative language の有効な手段として提示してきた。

本稿においては、まず、これまで筆者独自の英語教育法と教材作成とを顧み、検討する。最後に教材を素材に作成した教案例によって具体的な実践方法を示す。そして次稿において、川崎医療福祉大学の基礎教育課程における ESP としての医学・医療英語教育法と現状を報告し、さらに効果的な医学・医療英語教育を目指して課題を提示する。

## はじめに

先年来、文部省のいわゆる大綱化の方針に沿って、国公立、私立を問わず全国の大学で一般教育の見直しが行われ、外国語教育の改善、特に英語教育の活性化がクローズアップされてきた。従来の英語教育の中心であった「教養のための英語」は、幅広い視野をもった人間を育成するためにも、また長期的視野に立った教育効果の点でも、それなりに十分意味があったと思われる。しかし、国際化・グローバル化が加速度的に進む今日の日本において「話す」「聞く」を含めた「バランスのとれた英語運用能力」の向上が求められるようになり、そのことが英語教育への反省と批判につながっていったと言えるのであ

る。一方学生に習得させるべき専門教育の内容が量的にも増加の一途にある今日、カリキュラム上英語教育に割り当てられる時間に一定の制約があり、いわゆる「教養英語」に終始しているわけにはいかなかった、という現実が背景にあったとも考えられよう。

教養のための英語か、実用のための英語であるべきかはこれまでも事あるごとに論議の対象になってきた。そして英語教育に携わる者への外部からの批判の多くは、読解中心の教養英語、特に文学作品、しかも担当者の専門領域の作品を精読するという授業への批判が主であったと思われる。筆者は現在でも読解中心の英語教育は、基本的で幅広い英語力を身につける方法のひとつとして大変効果的であると

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科  
(連絡先) 清水雅子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

見なしている。またそれは、教師の人格を反映することが出来る側面をもち、教え育むという教育の視点からも極めて重要な役割を果たしていると考えられる。しかしそれは結果として、言語の多面性を無視することがあったのではなかろうか。言語には使用状況に応じてさまざまな表現のタイプ、文体があるが、一人の作家のみに限られる、しかもひとつの作品に終始する授業は、量的にも、言語のもつ機能や多面性を教えるにも限られたものになるからである。教材として用いるテキストの内容と英語が、必ずしも学生の将来のニーズや、興味の対象を意識した教育というよりも、往々にして教師の専門と関心に合った教材選びであり、教育であったと考えられる。

このような危険を避けるために、近年における英語教育の改革の流れが始まる以前から、筆者は医学・医療分野の学生に対して、教養課程の英語教育において ESP (English for Specific Purpose) としての医学・医療英語を導入し、教養の英語と communicative approach を主眼とする医学・医療の英語の融合を試み実践してきた。それは、医学・医療系の学生に何を教えればよいか、という対象を意識した教科教育方法論と教材論に基づくものであった。その教育法と教材開発は ESP の中心である EST (English for Science and Technology) を言語学的立場から提唱する H.G. Widdowson の *Explorations in Applied Linguistics* に提示された教育論に示唆を受けたものである。

Widdowson は言語教育に最も必要とされる精神を次のように言う。

So no claim is made that anything has been solved in these papers.

They are not meant to be read as prescriptions or conclusive arguments but as attempts to explore ideas, to work out the implications of certain insights in theory for a communicative approach to the teaching of language. (p.2. 下線筆者、以下同様)

そして、communicative approach の方法論は、次のように方向づけられている。

A new orthodoxy is emerging which defines the 'content' of language teaching in terms of function rather than form and which represents the learner's terminal behaviour as communicative rather than grammatical competence.

(p.65)

このように grammatical competence よりも communicative competence の上達を目標とするその実践は、writing と description が中心の discourse competence (伝達能力) を育てることに特徴があると言える。

筆者は科学技術の一分野である医療系のコースで学ぶ学生に有効な英語教育法として、Widdowson の 'attempts to explore ideas' と 'a communicative approach' という示唆に触発されて EST 教育とその教材作成に着手したのであった。しかしその register (使用域) を Widdowson が科学・技術分野の領域に限定しているのに対して、筆者は広い領域に拡大して教材を作成したことに特徴があると言えよう。

本稿では、筆者のこれまでの医学・医療英語教育の実践を顧み、その必要性、問題点、目標となる事柄などを検討し、今後のより効果的な教育実践の方向づけを試みたい。

論述の展開上、本稿では1982年から1991年までの川崎医療短期大学および川崎医科大学における教育実践の意図を示し、その経過を簡単に報告し、最後に具体的な教案例を示す。次稿で1991年以降現在に至る川崎医療福祉大学での医学・医療英語教育を扱うことにする。

## 1. 川崎医療短期大学での英語教育

1982年～1991年の9年間の短大教養課程における英語教育を顧み、なぜ医学・医療英語であったのか、その動機および実践を提示する。

教育当初数年は、筆者もいわゆる教養英語教育を試みた。テキストは人生や社会についてのエッセイ、現代の文学作品、あるいは紀行文などを選び、reading と comprehension を中心とした授業を行った。それはそれなりに教育効果がなかったとは思えない。また、speaking と hearing 中心の授業を試みたこともある。しかし oral approach を可能にするには、学生数(1クラス50名～120名)と時間数(週1回・90分)というカリキュラム上の制約の下では効果は薄いものであった。

当時の短大での英語担当教員は年度によって異なるが、医学用語、英会話を除いて一般教育の英語担当は1982年～1989年は2名、1990年～1992年は4名であった。筆者の担当時間数も年度によって異なり、3学期制を採用していたため学期によってばらつきがあるが、5コマ(45分1時間、1コマ2時間)～8コマであった(ただし医療福祉大学との兼任であった1992年は2コマ)。教育対象学生は、看護学

科2年制コースと3年生制コース、臨床検査科、放射線技術科、医療秘書科、栄養科、医用電子技術科であった。担当学年は1年次～2年次および3年次、授業時間数も学科によって異なった。2年次生、3年次生は病院実習中心のカリキュラムであるために、授業時間は月曜日午前、病院実習を終えて帰校する金曜日午後、土曜日午前の時間帯であることが多かった。学生は2年間または3年間に専門教科を早い時期から、質量ともに可能な限り多く学ばなければならないのであるが、教養課程の英語に対する授業態度は意欲的で真面目であったし、出席も極めて良好であった。このような担当教員数、担当時間数、学生の受講可能時間、学生の資質などの条件のもとで、何よりも学生にとってどのような英語教育が効果的であるか、試行錯誤をせざるをえなかった。その結果、将来医療の専門職に従事する学生にとって実践的な意味がある医学領域の英語を中心にして、自らの豊かな人間性を育みながら、同時に人間への洞察力を養うことの出来る教養英語とを兼ね合わせる英語教材が必要であると確信するようになった。このことが以下、3で述べるように、医学領域に焦点をあてたESP (English for Specific Purpose) 教材の開発を促す動機となった。

## 2. 川崎医科大学での英語教育

筆者は1983年度および1991年～1998年の計8年間、川崎医科大学の非常勤講師として英語を担当した。最後の1997年度に1年次を担当した以外はすべて2年次担当であった。2年次担当の教師は2名（外国人教師と筆者）、年間担当時間119時間（1コマ90分）、担当クラスは1学年2クラス、学生数は1クラスにつき約60名（留年生を含む）、外国人教師と筆者との裏表の講義形式であった。教授内容については全く要請はなく自由であったが、相手教師と内容、学生の授業態度等について連絡をとりながら進め、最終評価は教師がテストおよび平常の態度をディスカッションした後に2クラスの平均点とするものであった。この方法は、教師同士が情報を与えあい、何を教えているか理解しあうことが出来る、一種のチームティーチングの授業形式であり、その後川崎医療福祉大学での授業にも一部活用することができた。また特に、ネイティブと日本人の教師がそれぞれ単独で授業をしながら成績を合体させる独自の評価方法は、学生の得意、不得意を考慮した不公平感を与えない方法であり、評価の一方法として参考になると思われる。

1983年度の1年間、テキスト *English for Health* (Albert Simpson著, Mitsuo Tsuboi 編注) を使用

した。テキストは、「生命と細胞、血液と循環、呼吸、消化と排泄、歯、栄養、病原菌と薬、救急処置」という項目に分けられている。各項目はそれぞれ3～6の英文で構成されている。例えば、「呼吸」の項では、次のようなトピックスが配置され、それぞれ Questions が設けられている。

- (1) Respiration
- (2) Respiratory System
- (3) Figure : Respiratory System
- (4) Process of Respiration
- (5) Respiratory Problems

*English for Health* の趣旨は「医・歯・薬・看護コースの学生のために書き、...特に医・歯・薬系の学生が専門の勉強に入る前に常識的な用語や表現に十分慣れさせるため」であり、「広い意味で医学英語であるが、医学という点よりはむしろ英語という点に力点をおく」と編注者がまえがきで述べているように、EST であると同時に教養課程と専門課程との橋渡しの役割を意図して作成されていることは明らかである。

川崎医科大学では、多くの私立医科大学がそうであるように（最近では国立の医学部・医科大学の多くも同様のシステムを導入しているが）、2年次は解剖学、病理学、生理学、解剖学実習などの専門の医学基礎科目が楔型にカリキュラムに導入され、専門知識を習得つつある学年である。そのような学生には外国語教育と専門分野を結ぶ EST 教育が最適であると判断した。適切な教材を選ぶ中で、当時はそれにふさわしい市販のテキストの数は極めて限られていたが、このテキストはコンパクトでありながら、上記のように医学・医療の領域の基礎的な内容を網羅し、筆者の医科大学での英語教育の意図に最適であると思われた。

しかしながら、2年次は学生の学習量が1年次に比べて急激に増加し、専門課程の学習の厳しさを体験する学年でもある。その中に挿入される「英語」の授業に対する学生の反応はさまざまであると実感された。本来英語を得意とする学生、意欲的に全学科目を学習しようとする学生にとっては「英語」は苦痛なものではなく、授業態度も極めて良好であった。しかし留年生を含むため1クラス60名前後の学生に対して、EST としての医学を教材にして discourse 能力を高めようとする授業形態は多くの労力を必要とし、極めて困難であると痛感した。また、裏表の授業で外国人教師による oral approach がなされていることを併せると、このような多種多様な学生の関心を維持しながら英語力を増進するためには、別の

ファクターを導入する必要があると考えるに至った。

再び1991年から非常勤講師として2年次生を担当し、その間にはESTとしてのdiscourse competence育成のために、医学文例の英作文を導入し、学生間で添削作業を行う方法を取り入れたこともあったが、やはり学生数がネックとなり期待したほどの成果はあがらなかった。1991年から1998年の医科大学における授業は、次項で述べるEAPとEOPを共有するESPを目指す教育であったが、それは、1983年度に医科大学で英語教育に携わった経験に基づくものであり、1991年からの川崎医療福祉大学での教育と教材及び教育方法において共通点が多い。

### 3. ESPとしての医学・医療英語教育を目指して

#### 3-1 ESP教育法について

Widdowsonの*Exploration in Applied Linguistics*が出版されたのは1979年である。しかし世界的に、外国語教育におけるcommunicative approachの提唱は1970年代初頭に始まる。それは主として思想の自由な伝達をめざすコミュニケーション活動に関心が集まってきたことによるものである。主として英語のsystemを教え、習慣形成と言語技能を伸ばすことに力点を置いた、従来のstructural approachでは不十分であることから、新しいプログラムが開発されるようになった。言語のさまざまな役割や機能に応じて生じるその多様性を識別する教育研究領域が設定され始めた。そのような英語教育の方向づけの中でESP (English for Specific Purpose) は特にイギリスを中心に研究開発が進められた分野である。それは大きくEAP (English for Academic Purpose) とEOP (English for Occupational Purpose) に分けられる。EAPは学校教育において勉学に必要な英語でのコミュニケーション技能を育てることを目標とし、EOPは特定の職業において要求されるコミュニケーション技能の養成を目標とする。前者はcurriculum-orientedであり、後者はactivity-orientedである。そしてESTはEATの中心的な位置を占める教育法である。Widdowsonの応用言語学の視点からのEST教育は多くのcommunicative approachがoral practiceに重点が置かれるのに比べて、既に述べたようにwritingとdescriptionによるdiscourse competence (伝達能力) に的が絞られている。そしてその際、英語教師の役割を一貫して、専門分野としての科学教育のプログラムに係わるのではなく、一科目としての英語の教育に位置づけ、そこでdiscourse competenceを育てることにあるとしている。但し、その教育法は専門の原理に近づけば近づくほど、二つの領域を統合する

適切な英語の使用に成功するであろうと述べている (p.43)。しかしながら、Widdowsonのテキストには医学分野の教育法は具体的にはexerciseが例示されているだけである。筆者はその教育精神—探求と工夫—に従って学生の専門分野を考慮した教材を作成し、学生の反応を確かめながら開発していった。

#### 3-2 教材開発 [1]

教材を作成する際にまず「身体」に関する英語を導入し、次のように編集した。

##### 章

- 1: Parts of the Body
- 2: The Human Skeleton
- 3: The Muscular System
- 4: The Digestive System
- 5: The Circulatory System
- 6: The Respiratory System
- 7: The Nervous System
- 8: The Sense Organs
- 9: The Brain System
- 10: The Lymphatic System
- 11: The Urinary System
- 12: Geriatrics
- 13: The Reproductive System

各章は、それぞれFigure (図)、専門用語 (英語)、構造と機能についての英文、Lecture, Reading, English Expressions で構成した。

この教材と、先に紹介したDr. Simpsonの*English for Health*との違いを比較するために、同じ項目のThe Respiratory Systemの構成を以下に示す。

- (1) Figure: 身体用語 (12語)
- (2) 英文: Organs of The Respiratory System; Exercise
- (3) 英文: Mechanics of Breathing; Reading Comprehension, Exercise
- (4) Lecture: Vivisection (生体解剖) = (vivi-) + (section)
- (5) Reading: *The Sea and Poison* (『海と毒薬』) 抜粋; Exercise
- (6) English Expression: 「なぜ三人称単数なのか」

純粋にEST教材に近い*English for Health*に比べて、筆者の教材は医学・医療の専門領域の英語および英文を軸にしながら、Lectureに医学・医療の領域に関連のある話題を選び、次に同じテーマをもつ文学作品からの抜粋をReadingとして、教養的な視点を加味している点に大きな違いがある。しかしこの

教材は身体に関する英語を全面に置いたために、例えば、各専門のカリキュラムに組み込まれている医学用語（英語）の教科と競合するのではないか、あるいは内容が教養課程の英語教育の枠を超えて専門と重複し、学生に混乱を来すのではないか、といった疑問の声や、英語担当者は一般的な英語教育に専念するべきであるとする批判が生じる可能性・危険は確かにあった。

そのような疑問・指摘に対して、筆者はテキストの素材を「身体」としたが、それは一般英語教育の分野から全く逸脱しないものであったと言える。教材作成のために、医学書や医学英語にある程度習熟する必要はあったものの、その意図は *Widdowson* が次のように言うように、あくまでも身体に関する英語を通じて言語の普遍的な側面に焦点を当てながら、しかも学生の専門性と関心を考慮したものであった。

The proposal is that we should think of 'scientific English' not as a kind of text, but as a kind of discourse, that is to say a way of using English to realize universal notions associated with scientific inquiry (p.27) .

「身体」を教材としたのは、第1に医療系の学生にとって最も身近かで、しかも学習の基礎的対象であること、第2に人間の共通項目であること、第3に身体用語の多くがラテン語とギリシャ語に由来し、言語の概念を習得させるために適当であるという理由からであった。それは、医学・医療分野の学生に英語への関心を維持させ、学習の必要性を自覚させるために最適な学習素材と考えられた。特に身体は人間一般にとって普遍的な存在であり、身体用語を通して言語の多様性・普遍性を自然に学習できることが教材作成の支柱とする動機となったのである。

### 3-3 教材開発 [2]

教材 [2] は基本的には教材 [1] とほぼ同じ構成と内容であるが、Paragraph for Faster Reading および Appendix を加えてEST の色彩を強めた。

Paragraph for Faster Readingの項目は、

- (1) Health (健康) (2) Medicine (薬) (3) Nursing (看護) (4) Hospital (病院) (5) Radioactivity (放射能) (6) Food (食物)

Appendixの項目は

- (1) 病院用語 (2) 傷と薬 (3) 検査に関する用語一覧 (4) 連結形および接尾辞
- である。

(上記の構成要素の中で Paragraph for Faster Reading はその後、心身の健康をテーマとする「ヘルスサイエンスの英語入門」(講談社、1996年)に発展する。)

このようにして、医科大学での ESP 教材である *English for Health* の使用とその効果、短大における当初の教養英語教育への疑問、また両大学での1クラスの学生数、時間数、担当学年、カリキュラム上の条件が重複し、ESP だけでも教養だけでもなく、ESP と教養英語を含みながら、しかも両方の教材が矛盾なくつながりをもつ教材作成へと向かうことになった。教材 [1] [2] は、そのような体験に基づき将来医学・医療の分野の職業人となる学生を意識して作成し、教養課程での英語教育のひとつの形を提示したものであった。

## 4. ESP と教養英語の融合

前項の教材 [2] に修正を加えて出版したのが「医療技術者のための医学英語入門」(1992: 講社)である。本書について、その構成と意図を述べる。

本書は、(1)医療人にとっての communicative language としての医学英語の学習、(2)言語としての医学英語の学習、(3)医療人としての人間性の陶冶と思考の育成のための英文読解、という3項目から構成されている。各章は教材(2)とほぼ同様に次のように分かれている。

- Chapter 1 The Human Body
- Chapter 2 The Digestive System
- Chapter 3 The Respiratory System
- Chapter 4 The Circulatory System
- Chapter 5 The Lymphatic System
- Chapter 6 The Nervous System
- Chapter 7 The Sense Organs
- Chapter 8 The Urinary System
- Chapter 9 The Endocrine Organs
- Chapter 10 The Reproductive System
- Chapter 11 Aging
- Chapter 12 The Skeletal System
- Chapter 13 The Muscular System
- Appendix

さらに各章はそれぞれ次のように構成されている。

- (1) 人体の英語名称
- (2) 人体の構造と機能を説明する英文
- (3) 各章で扱う身体 of 体系に関連する10の英文

Chapter 3 *The Sea and Poison* (『海と毒薬』)

- Chapter 4 Transfusion (輸血)  
What does the red, blue and white stripe on the barber's pole mean? (理髪店頭にくるくるまわる赤, 青, 白色のサインポールの意味は?)
- Chapter 5 *Something for Joey* (『ジョーイ』)
- Chapter 6 History of neurology (神経学の歴史)
- Chapter 7 *The Doctor's Wife* (『華岡青州の妻』)
- Chapter 8 Kidney Dialysis (腎透析)
- Chapter 10 *Symposium* (『饗宴』)
- Chapter 11 *The Twilight Years* (『恍惚の人』)
- Chapter 13 *The Trojan War* (『トロイ戦争』)
- (4) 20のコラム欄 (可能な限り, 章で扱う体系に関連するトピックスを選んだ)
- Chapter 1 薬指はmedical finger?
- Chapter 2 ニックネームはappendix?  
aspとaspirinとCleopatraとADME
- Chapter 3 vivisection (生体解剖)=vivi-(連結形)+section (語根)  
英語で一番長い単語は?
- Chapter 4 医学用語と複数形  
It was Greek to me.
- Chapter 5 Cancer とカニ  
医学用語の構成様式
- Chapter 6 句読点は大切です
- Chapter 7 心の目  
発音:強形[æ]と弱形[ə]
- Chapter 8 cow の肉はなぜ beef?
- Chapter 9 なぜ三人称単数なのか
- Chapter 10 widowerが先か, widowが先か  
AIDS のフルスペリングは?
- Chapter 11 q と u とは一心同体?
- Chapter 12 (1) Time flies like an arrow.  
(2) Fruit flies like a banana.
- Chapter 13 アキレス腱  
What is human?
- (5) Appendix  
plane and direction (断面と方向)  
数の読み方  
Terms of hospital (病院用語)  
Names of diseases (病名)

- Symptom (症状)  
Expressions for wound, etc. (傷の表現)  
Types of medicine (薬の種類)  
Terms of examination (検査用語)  
Common medical abbreviation (略語)  
Prefix (数, 方向, 場所の接頭辞)  
Suffix (疾患と関わりのある接尾辞)  
Combining form and medical terms (連結形と医学用語)

各項目はそれぞれ次のような意図をもって準備した.

- (1) 医学・医療分野の学生にとっての専門用語 (医学英語) は常識的な基本用語に留める.
- (2) 医学・医療の基礎知識として知っておくべき事実についての英文を読む. 情緒を排除した平易・簡潔な文体で書かれた英文に接して, 自然科学の領域で用いられる文体に慣れる.
- (3) 各章で扱う体系に関連するテーマの英文: 科学英文とは違った多様な文体を知るために, 文学作品のみならず, 平明な英文で書かれたさまざまな読みものからの抜粋を読む. 人間性への洞察を深め, 問題意識の発展を目標とするが, あくまでも導入に留め, それ以上は各自の関心と興味にゆだねる.
- (4) 学生として知ってほしい医学・医療をはじめとする, 言語, 歴史的事実, 社会現象, などの事柄についての知識を与えながら, 自明の事実・事柄についての疑問をもつ感性を育てることを目指す.

上記項目の(3)及び(4)は先に指摘したように, 医療人としての人間性を豊かにするための読み物と話題を提供し, 言語としての英語への関心, 医学英語の普遍性と特殊性を考える契機にするための教材であった. その選択は文学作品に限らず, 各章にふさわしいトピックスを, 映画の原作, 英語の歴史, 医学の歴史, ギリシャ神話, 聖書, シェイクスピアの作品, 日本の小説の英訳など幅広い分野から選んだ. この(3)と(4)との挿入は, 結果として単調になりがちな(1)(2)の教材の間に挿入することによって, 将来医学・医療に従事する学生に広い視野をもった人間観を育み, 医学における人間性の問題を考えてほしいと意図したものである.

## 5. テキストを活用した教案作成の提案

上記の構成と意図が具体的には教材によってどのように活かされるかを, テキストを素材として作成した次のような教案によって紹介する.

## 教案

教材：Chapter 3 The Respiratory System

### 教案要旨

#### 1) 用語の説明, 発音

##### ポイント

- (1) respiratory (respiration), inspiration, expiration の言語構造の説明
- (2) respire (呼吸する) と spirit (魂) の関連について説明

#### 2) respiratory systemの構造と機能についての英文読解

#### 3) 肺疾患, tuberculosis (結核) の学習

#### 4) Reading: *The Sea and Poison* (第2次世界大戦中, 九州大学医学部での生体解剖事件を題材にした遠藤周作の小説『海と毒薬』の翻訳) から結核治療のための肺切除手術の場面の抜粋. テキスト英文から次の項目を学習する.

##### (1) 医学英語学習:

\* 英語の脳髄は名詞です

- (a) 身体と肺
- (b) 外科手術と器具と薬物
- (c) 病院とスタッフの英語

\* 英語の心臓は動詞です

- (a) 医療の動詞
- (b) ちょっとおもしろい go と come

\* 英語の表情は形容詞です

- (a) 身体表現から学ぶ日本語と英語の表現の相違
- (b) 医療器具
- (c) 症状・感情の表現

##### (2) 主要登場人物である研修医勝呂と戸田の心の動き, 葛藤の描写から人間性の相違と共通性を理解する.

#### 5) Video 鑑賞: : 映画『海と毒薬』の鑑賞:

- (1) 全体像を把握するため「あらすじ」(プリント準備)を紹介.
- (2) 映画観賞:「登場人物」の紹介(俳優名・登場人物名プリント準備)

#### 6) reading と video 鑑賞の後で, 勝呂と戸田やその他の登場人物の行動と心理を理解しながら, 医療人としての倫理と併せて, 時代を越えて現代に生きる私達にも共通する日本人像と普遍的

人間像を考察する.

- 7) tuberculosis (結核) と cicada (蟬) を1例にして, 俳句と短歌の英語訳による異文化理解を試みる.

上記の授業の趣旨は, これまで述べてきたように EAP (EST) と EOP 教育を融合することである. またテキストに限定されずにそれを素材として自由に教案を作成し, 発展することができる事例となろう. 特に身体 of 英語とそれに関連する reading のテーマ・コラムのトピックスは, 職業人教育と外国語教育の接点となる教材として無理のない範囲のものであり, それぞれの項目にお互いが矛盾しないように一つの流れを作ったことに特徴がある. また単なる用語学習と異なって, 文中に使用された用語の学習から「使える医学英語」が自然に習得できる効果をねらった. Video 教材は学生の関心と興味をもたせて reading 理解を深めるためにも有効であろう.

医療短期大学と医科大学での体験によって案出した, このような専門課程の英語を使用域とする基礎学習と教養英語との融合は決して不可能でもなく矛盾するものでもなく, Widdowson の言う教育者の explorationspirit と device によって実現できると考える. ただ, discourse competence を授業の主体にするならば, 用語を用いた練習問題の作成が必要となるであろう. しかし上記のような教育も communicative approach の一方法であると確信している. コミュニケーションとは何か, を定義することは難しいが, 筆者のコミュニケーション理解は, 単なる英会話や情報の伝達を意味するのではなく, 思想の伝達を意味し, その伝達する思想を育成することも大学における重要な英語教育の使命であると考え. その意味で筆者の提示する医学・医療英語と教養英語とを有機的に関連づけた教育方法は, 実践的でありしかも思想育成の点でも communicative approach の有効な手段であると主張できる.

次稿ではこれまでの教養課程における医療・医学英語教育を前提として, 川崎医療福祉大学での医学・英語教育における実践といくつかの問題点を検討し, さらに発展的な英語教育法と教材論の方向づけを試みる予定である.

## 文 献

- 1) Widdowson HG (1979) *Explorations in Applied Linguistics*, Oxford University Press, Oxford.
- 2) 垣田直巳 (1979) 英語教育ハンドブック, 初版, 大修館書店, 東京.
- 3) 鳥居次好編集 (1979) 英語科教育の研究, 大修館書店, 東京.

- 4) 飯野至誠 (1979) 英語の教育—変遷と実践—, 大修館書店, 東京.
- 5) Simpson A (1983) *English for Health*, Tsuboi M, eds. 南江堂, 東京.
- 6) 清水雅子 (1992) 医療技術者のための医学英語入門, 講談社, 東京.

(平成11年 5 月12日受理)

## **The Practice and Problems of Teaching English for a Specific Purpose to Medical and Para-medical Students in a Basic Educational Course**

Masako SHIMIZU

(Accepted May 12, 1999)

Key words : ESP, EOP, ENGLISH FOR LIBERAL ARTS, MEDICAL ENGLISH,  
ENGLISH FOR HEALTH SCIENCES

### **Abstract**

As the internationalization and globalization of Japan accelerates, general education in universities, especially instruction in foreign languages, has been under review.

Specifically, strong attention has been paid to the revitalization of English education. The main criticism from external critics and groups pertains to the teacher-guided intensive reading of English, which usually covers ancient to contemporary English or American Literature. Even now, I believe the traditional English reading class, under guidelines of national curricular policy, remains an effective educational strategy. However, it has not necessarily been an educational approach which takes students' interests and their future occupational goals into consideration. Being aware of students' needs in the medical and para-medical fields for about fifteen years, I have introduced English for specific purpose (ESP) into the English classes, as suggested by H.G. Widdowson's communicative approach in English for science and technology (EST). Also, I have combined ESP with general English in preparing teaching materials.

In this paper, I examine the English educational strategy and materials that I used at Kawasaki College of Allied Health Professions and Kawasaki Medical School. In a subsequent paper, medical English teaching will be examined, including identifying some problems in the basic course at Kawasaki University of Medical Welfare.

Correspondence to : Masako SHIMIZU

Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Kawasaki Journal of Medical Welfare Vol.9, No.1, 1999 25-32)